青森県総合学校教育センター　研究紀要［2010.3］
Ｆ９－０１

教育相談

中学校における教師とスクールカウンセラーの連携に関する研究
－教師とスクールカウンセラーの意識調査を通して－

教育相談課　　研究員　　佐　藤　　哲　也

要　　旨

県内中学校のスクールカウンセラーとそのスクールカウンセラー担当教師を対象に，「連携に関する意識調査」を実施した。分析した結果，両者の連携に関する同じ意識や意識の差があることがわかった。よりよい連携の在り方として，これらの連携に関する同じ意識や意識の差があることを理解した上で，連携する際は，コーディネーターとなる教師が中心となって，細部にわたり調整することが重要であると示唆された。

キーワード：意識調査　連携　コーディネーター　相関分析

Ⅰ　主題設定の理由

学校現場では，不登校やいじめなど以前からあった問題に加えて，発達障害や保護者対応など，新しい傾向の問題に直面していることから，心理の専門家であるスクールカウンセラーが，教師にとって大いに頼りになる存在となっている。内田(2009)は，スクールカウンセラー活用を，「学校，特に中学校において，ほぼすべての学校にスクールカウンセラーが配置されているので，カウンセラーをうまく活用し，教育相談体制の充実を図ることが子どもの様々な問題行動への早期対応，未然防止につながっていくと考えられます」と述べている。

青森県教育委員会(2009)は，平成20年度における青森県スクールカウンセラー配置事業相談状況集計表の中で，「実相談者数は，児童生徒が一番多く，次いで教諭・養護教諭，保護者となっている。児童生徒のみならず，教師，保護者への対応も求められている」と示し，「一人あたりの相談回数を「延べ相談者数÷実相談者数」で考えると，例えば小学校の児童は1.6程度となり，相談者一人あたり１～２回程度の回数であるのに対し，中学校では3.9程度となり，相談者一人あたり４回程度の面談をしていることになる。単純にはとらえられないが，小学生よりも中学生の方が継続的に相談している傾向が伺える」とも示している。本県のスクールカウンセラーの勤務体制は，配置校では週１回，派遣校では月１，２回が平均である。生徒に充分なカウンセリングを行うためには，教師とスクールカウンセラーの効果的な連携が必要不可欠なものではないかと考えられる。

スクールカウンセラーと教師が連携するに当たっての課題を解決することで，相談者に対して，よりよい支援が可能になるのではないだろうか。そこで，本県の教師とスクールカウンセラーの連携に関する意識，連携の現状や課題を調査・分析し，今後の教育相談の充実に役立てたいと考えた。

青森県の中学校における教師とスクールカウンセラーの連携の意識の相関関係に着目し，その意識の差から教師とスクールカウンセラーのよりよい連携の在り方はどうあるべきなのか，その方向性を探りたいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

中学校における教師とスクールカウンセラーの学校カウンセリングに関する意識調査をすることにより，意識の相関関係を明らかにし，今後の教師とスクールカウンセラーの連携の在り方について探る。

Ⅲ　研究仮説

教師とスクールカウンセラーの学校におけるカウンセリングに関する意識調査をすることにより，意識の相関関係が明らかになるだろう。また，意識調査の中で意識の差がみられた部分に焦点をあて，その差を少

なくする手だてを探ることにより，よりよい連携の在り方が明らかになるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　調査用紙の作成

吉田(2005)は，「スクールカウンセラーが学校の中で教職員と連携してその能力を十分に発揮していくためには，学校とスクールカウンセラーをつなぐコーディネ―ター的な役割を果たす教職員の存在が不可欠である。学校から見たスクールカウンセラー，スクールカウンセラーから見た学校の双方に対してアンケート調査を行うなどして両者の間に真の相互理解と共通認識を醸成するなど，学校におけるスクールカウンセラーの効果的な活用の在り方が一層求められるのである」と述べている。教育の専門家である教師と心理の専門家であるスクールカウンセラーが，学校という場で互いの立場から相談者へかかわっていく上で，両者の連携がよりよい相談者への支援につながっていくものと考えられる。

連携に関して，教師とスクールカウンセラーの両者に共通の意識調査を実施し，調査を通して本県の現状を明らかにしながら，よりよい連携の在り方について考えていくことにした。

２　予備調査について

本調査用紙作成にあたり，実際の現場で教師とスクールカウンセラーの連携に関して，両者がどのようなことが課題だと思っているのかを把握するとともに，本県の相談内容の現状についても把握することを目的とする。

スクールカウンセラー配置・派遣校の担当教師とそのスクールカウンセラーに対し，連携に関してのキーワードとその理由を簡単に記述してもらう自由記述にて，回答してもらった。

３　本調査について

予備調査の結果を基にして，本県の中学校における教師とスクールカウンセラーの連携に関する事柄について両者の意識の差を明らかにし，その差から，よりよい連携の在り方を見いだすことを目的とする。また，連携の現状や課題を明確にすることで，今後の学校カウンセリングの方向性を示すことも目的とした。

(1) 調査対象者

県内における公立中学校に配置・派遣されているスクールカウンセラー(40人)とその学校(81校)のスクールカウンセラー担当教師の合計121名とした。無記名式の質問用紙法で調査し，そのうちの109名から回答を得た。(回収率＝90.1%)なお，年代・性別の人数構成は表１のとおりである。

表１　調査対象者の教師，スクールカウンセラー別の年代・性別の人数構成

年代	性別	教師	スクールカウンセラー	合計
20代	男性		3	3
	女性		9	9
30代	男性	10	3	13
	女性	3	5	8
40代	男性	29	2	31
	女性	7	4	11
50代	男性	19		19
	女性	5	6	11
60代	女性		2	2
70代	男性		2	2
合計		73	36	109

※欠損データを含んだ集計である。

(2) 調査時期

平成21年８月７日(金)～９月25日(金)

(3) 調査手続き

調査依頼校に対して，「教師とスクールカウンセラーの連携に関する意識調査」の調査用紙を担当教師分，配置・派遣スクールカウンセラー分の２部と返信用封筒(切手貼付)を送付した。なお，調査依頼校の担当教師には，スクールカウンセラーの回答用紙の回収ののち，返信用封筒でまとめての返信をお願いした。また，複数校にまたがるスクールカウンセラーに対しては，一度提出された方は二度の提出をしなくてもよい旨を説明した文書を添付した。

(4) 調査内容

質問１には，予備調査から記述が多かった各キーワードと，それに添えられた理由をさらに整理・分析し，教師とスクールカウンセラーの連携に関する事柄について，現在の意識を「そう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」の４件法にて求めるように設定した。作成に当たっては，大矢(2003)による「中学校における教師とスクールカウンセラーの連携に関する研究」を参考にした。表２(SCとは，スクールカウンセラーの略)は，質問１の質問項目及び設定理由である。

文部科学省(2007)は，「スクールカウンセラーの役割及び意義・成果について」の中で，スクールカウンセラーの業務内容を示している。質問２では，それらを参考にし，スクールカウンセラーの業務内容について，この１年間で実際にかかわった業務内容の中で一番多かったものと，一番に重点を置くべきと考えている業務内容はどれなのかを１つずつ，作成した８項目の中から選ぶ形を設定した。質問３で

は，学校カウンセリングの相談内容について，この１年間で実際にかかわった相談内容の多い順に３つ，また，重点を置いて取り組むべきと考えている順に３つ，予備調査を基に作成した34項目から，それぞれ選ぶ形に設定した。

質問４では，予備調査において，情報共有と守秘義務のキーワードが多く記述されていたことから，これらに関する希望や考えを自由記述で求める形に設定した。以上，記号で選択するものを27項目，自由記述１項目の全28項目の質問項目となった。

表２　質問１の質問項目及び設定理由

質問項目	設定理由
①　教師とＳＣが情報交換・共有するためには，ＳＣの勤務時間・日数をもっと増やす必要がある。	SCの勤務体制に関する意識を見るために設定した。
②　教師とＳＣが情報交換・共有するためには，教師の忙しさを軽減する必要がある。	教師の多忙さに関する意識を見るために設定した。
③　教師とＳＣは，情報交換・共有後，コンサルテーション(援助の仕方の打ち合わせ)の時間が必要である。	コンサルテーションの必要性に関する意識を見るために設定した。
④　教師とＳＣが相談者を理解する上で，相談者の日常生活や学校生活を把握することが必要である。	相談者の相談までに至る経緯等を把握することの必要性に関する意識を見るために設定した。
⑤　教師とＳＣが相談者を理解する上で，知り得た情報はすべて交換・共有することが必要である。	相談者情報の扱いに関する意識を見るために設定した。
⑥　教師とＳＣが相談者を理解する上で，守秘義務を守りながら，情報交換・共有することが必要である。	相談者情報の扱いに関する意識を見るために設定した。
⑦　教師とＳＣの連携を深めるためには，コーディネーターとなる教師が重要である。	学校や地域とSCのコーディネーターとなる教師の重要性に関する意識を見るために設定した。
⑧　教師とＳＣは，互いの専門性を認め合うことが必要である。	相互理解の必要性に関する意識を見るために設定した。
⑨　教師とＳＣの連携は，うまくいっている。	県内のSC配置・派遣校における連携状態に関する意識を見るために設定した。
⑩　教師は，ＳＣに生徒・保護者などに関する相談を積極的にしている。	教師のSC積極的活用に関する意識を見るために設定した。
⑪　教師は，ＳＣに生徒・保護者等の対応を任せっきりにしている。	教師のSCへの依存に関する意識を見るために設定した。
⑫　教師は，ＳＣからカウンセリングに関する技術などを学ぶことが必要である。	SCの多面的活用に関する意識を見るために設定した。
⑬　教師は，ＳＣの受け入れ体制を整備することが必要である。	県内のSC勤務環境に関する意識を見るために設定した。
⑭　ＳＣは，教師に対して，自分の専門分野や得意分野を明確にしている。	SCの自己開示に関する意識を見るために設定した。
⑮　ＳＣは，教師に対して，助言や援助を積極的に行っている。	SCの教師に対する積極性への意識を見るために設定した。
⑯　ＳＣは，生徒・保護者に積極的にかかわろうとしている。	SCの生徒・保護者に対する積極性への意識を見るために設定した。
⑰　ＳＣは，教師の求めや相談者の状態に応じ，相談者を各関係機関へ紹介することが必要である。	SCの業務内容に関する意識を見るために設定した。
⑱　ＳＣは，生徒に対して，予防的・開発的な援助(SGE，SST，ガイダンス等)を積極的に行っている。	SCの行う予防的・開発的な援助の必要性に関する意識を見るために設定した。
⑲　今後，教師とＳＣ，スクールソーシャルワーカーとの連携が必要である。	スクールソーシャルワーカーの必要性に関する意識を見るために設定した。

４　結果と考察

(1)　「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の集計・分析

ア　「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の比較(教師，スクールカウンセラー別)

「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の教師とスクールカウンセラーの平均値において，有意差があるかどうかを検討するため，統計処理(ｔ検定)を行った。結果は表３のとおりである。なお，欠損値のあるデータは，統計解析においてリストごとに除外した。「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の比較から，教師がスクールカウンセラーと比べて平均値が高

く，差がみられた項目は以下の７項目であった。

項目５「教師とSCが相談者を理解する上で，知り得た情報はすべて交換・共有することが必要である」(両側検定：t(104)=4.68，p<.01)では，平均値の差が大きく，スクールカウンセラーは情報のすべてを交換することに消極的であると思われる。教師の自分のかかわる相談者の情報は少しでも多く把握しておきたいという意識が，表れたものと考えられる。

項目10「教師は，SCに生徒・保護者などに関する相談を積極的にしている」(両側検定：t(58)=2.15，p<.05)では，教師はスクールカウンセラーに比べ，教師がスクールカウンセラーに生徒・保護者に関しての相談を積極的に行っていると意識しているが，スクールカウンセラーはそれほど意識していないことがうかがえる。

項目12「教師は，SCからカウンセリングに関する技術などを学ぶことが必要である」(両側検定：t(104)=3.63，p<.01)では，スクールカウンセラーは，教師がスクールカウンセラーからカウンセリングに関する技術などを学ぶことの必要をあまり意識していないことがうかがえる。教師の相談者に応じた適切な対応をするためにカウンセリングに関する技術などを学びたいという意識が，表れたものと思われる。

項目14「SCは，教師に対して自分の専門分野や得意分野を明確にしている」(両側検定：t(54)=2.58，p<.05)では，教師はスクールカウンセラーに比べ，スクールカウンセラーが教師に対して，自身の専門分野や得意分野を明確にしていると意識しているが，スクールカウンセラーはあまり意識していないことがうかがえる。教師のスクールカウンセラーの専門分野や得意分野について知っておきたいという意識が，表れたものと思われる。

表３　「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の平均値・標準偏差・有意差

質問項目	教師・SC別	教師	SC	有意差
	人数	N=71	N=35	
項目１	平均値	3.00	3.20	
	標準偏差	0.81	0.80	
項目２	平均値	3.20	3.11	
	標準偏差	0.73	0.76	
項目３	平均値	3.61	3.66	
	標準偏差	0.62	0.54	
項目４	平均値	3.58	3.60	
	標準偏差	0.62	0.55	
項目５	平均値	2.93	2.14	p<.01
	標準偏差	0.83	0.77	
項目６	平均値	3.63	3.71	
	標準偏差	0.54	0.52	
項目７	平均値	3.10	3.43	p<.05
	標準偏差	0.61	0.65	
項目８	平均値	3.52	3.83	p<.01
	標準偏差	0.63	0.38	
項目９	平均値	3.13	2.91	
	標準偏差	0.65	0.74	
項目１０	平均値	2.92	2.54	p<.05
	標準偏差	0.73	0.89	
項目１１	平均値	1.59	1.60	
	標準偏差	0.58	0.60	
項目１２	平均値	3.11	2.63	p<.01
	標準偏差	0.62	0.69	
項目１３	平均値	3.21	3.23	
	標準偏差	0.67	0.60	
項目１４	平均値	2.94	2.46	p<.05
	標準偏差	0.75	0.98	
項目１５	平均値	3.24	2.60	p<.01
	標準偏差	0.62	0.77	
項目１６	平均値	3.18	2.91	.05<p<.10
	標準偏差	0.68	0.61	
項目１７	平均値	3.08	3.77	p<.01
	標準偏差	0.69	0.43	
項目１８	平均値	2.83	2.14	p<.01
	標準偏差	0.88	0.85	
項目１９	平均値	3.14	2.91	
	標準偏差	0.68	0.82	

項目15「SCは，教師に対して，助言や援助を積極的に行っている」(両側検定：t(56)=4.26，p<.01)では，教師はスクールカウンセラーから積極的に助言や援助を受けていると意識しているが，スクールカウンセラーはそれほど意識していないことがうかがえる。スクールカウンセラーは教師が多忙で直接会う機会が少なく，助言や援助を行っていないと考えているものと思われる。

項目16「SCは，生徒・保護者に積極的にかかわろうとしている」(両側検定：t(104)=1.97，.05<p<.10)では，教師はスクールカウンセラーに比べ，スクールカウンセラーが生徒・保護者に積極的にかかわっていると意識しているが，スクールカウンセラーはそれほど意識していないことが，ややうかがえる。

項目18「SCは，生徒に対して，予防的・開発的な援助(SGE・SST・ガイダンス等)を積極的に行っている」(両側検定：t(104)=3.84，p<.01)では，平均値の差が大きく，教師はスクールカウンセラーが生徒に対して予防的・開発的な援助を積極的に行っていると意識しているが，スクールカウンセラーはそれほど行ってなっていないと考えているものと思われる。教師は生徒に対する予防的・開発的な援助の取り組みが必要と考えているものと推察される。

スクールカウンセラーが教師と比べて平均値が高く，有意差がみられた項目は以下の３項目であった。

項目７「教師とSCの連携を深めるためには，コーディネーターとなる教師が重要である」(両側検定：t(104)=-2.55，p<.05)では，両者の平均値にやや高い傾向がみられた。両者ともコーディネーターとなる教師を重要と考えている意識がうかがえる。その中でもスクールカウンセラーの平均値が高く，スクールカウンセラーのほうが教師に比べて，コーディネーターとなる教師をより重要と考えているものと思われる。

項目８「教師とSCは，互いの専門性を認め合うことが必要である」(両側検定：t(99)=-3.11，p<.01)では，両者の平均値に高い傾向がみられた。両者とも互いの専門性を認め合うことを必要と考えていることがうかがえる。その中で，互いの専門性を認め合うことを必要とするスクールカウンセラーのより強い意識が，表れたものと考えられる。

項目17「SCは，教師の求めや相談者の状態に応じ，相談者を各関係機関へ紹介することが必要であ

る」(両側検定：t(104)=-5.39，p<.01)では，平均値の差が大きく，スクールカウンセラーは教師の求めや相談者の状態に応じ，相談者を各関係機関へ紹介することが必要と意識していることがうかがえる。教師には，自分の責任において相談者への対応をしようとする意識があるものと思われる。

イ　「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」間の関係(教師)

図１は，「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の間で，どの項目間に関係性があるのか相関係数を求め，有意水準が５％以下のものだけを記載した。

「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の比較の中で，教師がスクールカウンセラーと比べて平均値が高く，差がみられた７項目において，中程度以上の相関関係がみられた項目を以下に示した。

(ｱ) 項目10「教師は，SCに生徒・保護者などに関する相談を積極的にしている」と項目11「教師はSCに生徒・保護者等の対応を任せっきりにしている」の間には負の中程度の相関があった。スクールカウンセラーに対して生徒・保護者などに関する相談を積極的にしている教師は，スクールカウンセラーに生徒・保護者等への対応を任せっきりにはしていないと考えていると思われる。

(ｲ) 項目12「教師は，SCからカウンセリングに関する技術などを学ぶことが必要である」と項目３「教師とSCは，情報交換・共有後，コンサルテーション(援助の仕方の打ち合わせ)の時間が必要である」の間には正の中程度の相関があった。スクールカウンセラーからカウンセリングに関する技術を学ぶことを必要とする教師は，コンサルテーションも必要と考えていると思われる。

(ｳ) 項目15「SCは，教師に対して，助言や援助を積極的に行っている」と項目16「SCは，生徒・保護者に積極的にかかわろうとしている」及び，項目15と項目18「SCは，生徒に対して予防的・開発的な援助(SGE・SST・ガイダンス等)を積極的に行っている」の間には，それぞれ正の中程度の相関があった。スクールカウンセラーが教師に対して，助言や援助を積極的に行っているととらえている教師は，スクールカウンセラーが保護者に対しては積極的にかかわり，生徒に対しては予防的・開発的な援助を積極的に行っていると考えていると思われる。

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17	項目18	項目19
項目1																			
項目2																			
項目3	.341 **																		
項目4																			
項目5	.275 *		.249 *	.249 *															
項目6			.245 *	.381 **															
項目7	.374 **			.297 *															
項目8					.262 *	.317 **	.346 **												
項目9	.265 *			.308 **															
項目10				.296 *	.248 *				.381 **										
項目11							-.331 **			-.457 **									
項目12		.413 **																	
項目13				.283 *					.425 **			.351 **							
項目14	.234 *			.252 *	.244 *			.364 **	.276 *	.328 **		.349 **	.389 **						
項目15										.328 **			.253 *	.396 **					
項目16				.318 **						.346 **			.296 *	.326 **	.469 **				
項目17		.312 **	.381 **			.237 *													
項目18	.301 *									.333 **		.271 *		.396 **	.416 **	.362 **			
項目19	.304 **									.302 *				.286 *			.428 **	.246 *	

*:p<.05　**:p<.01

図１「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」間の相関分析(教師)

ウ　「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」間の関係(スクールカウンセラー)

図２は，「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の間で，どの項目間に関係性があるのか相関係数を求め，有意水準が５％以下のものだけを記載した。

「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」の中で，スクールカウンセラーが教師と比べて平均値が高く，有意差がみられた３項目において，中程度以上の相関関係がみられた項目を以下に示した。

項目７「教師とSCの連携を深めるためには，コーディネーターとなる教師が重要である」と項目19「今後，教師とSC，スクールソーシャルワーカーとの連携が必要である」の間には正の中程度の相関があった。コーディネーターとなる教師が重要と考えているスクールカウンセラーは，教師，スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカーとの連携が必要と考えていると思われる。

	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9	項目10	項目11	項目12	項目13	項目14	項目15	項目16	項目17	項目18	項目19
項目1																			
項目2																			
項目3																			
項目4																			
項目5																			
項目6																			
項目7																			
項目8																			
項目9																			
項目10					.399 *				.475 **										
項目11	.354 *									-.352 *									
項目12									.396 *										
項目13							.343 *												
項目14					.338 *				.500 **			.606 **							
項目15					.422 **				.501 **	.454 **		.374 *		.713 **					
項目16														.361 *	.422 *				
項目17																			
項目18												.346 *			.359 *				
項目19							.510 **												

*:p<.05　**:p<.01

図２「教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目」間の相関分析(スクールカウンセラー)

エ　考察

教師とスクールカウンセラーの連携に関する質問項目の比較と関係の両面より導き出された項目から，よりよい連携の方向性が示唆された。

第一に，項目10の教師とスクールカウンセラーの平均値の比較では，教師がスクールカウンセラーより高く，その差は有意であった。また，項目10と項目11の相関関係は，教師とスクールカウンセラーの両方にみられ，教師により強い相関関係がみられた。さらに，項目11の平均値をみると両者とも低い数値を示している。このことから，スクールカウンセラーに生徒・保護者などに関する相談を積極的にしている教師は，スクールカウンセラーに生徒・保護者等への対応を任せっきりにはしていないという意識があり，スクールカウンセラーにも教師よりは弱いが，ほぼ同じとらえ方があるものと考えられる。

第二に，項目12の教師とスクールカウンセラー平均値の比較では，教師がスクールカウンセラーより高く，その差は有意であった。また，項目12と項目３の相関関係は，教師にはみられたが，スクールカウンセラーにはみられなかった。さらに，項目３の平均値をみると両者とも高い数値を示している。このことから，教師は，スクールカウンセラーからカウンセリングに関する技術などを学ぶことと，コンサルテーションを受けることをひとまとめとしてとらえ，必要と意識しているが，スクールカウンセラーは，それぞれを別のものとしてとらえ，その中でもコンサルテーションを必要と意識しているものと思われる。

第三に，項目15の教師とスクールカウンセラーの平均値の比較では，教師がスクールカウンセラーより高く，その差は有意であった。また，項目15と項目16及び項目15と項目18の相関関係は，どちらも教師とスクールカウンセラーの両方にみられ，教師により強い相関関係がみられた。さらに，項目16と項目18の平均値の比較では，どちらも教師がスクールカウンセラーより高く，その差は有意であった。このことから，スクールカウンセラーが教師に対して，助言や援助を積極的に行っているととらえている教師は，スクールカウンセラーが保護者に対しては積極的にかかわり，生徒に対しては予防的・開発的な援助を積極的に行っているという意識があり，スクールカウンセラーにも教師よりは弱いが，同じとらえ方があるものと考えられる。

第四に，項目７の教師とスクールカウンセラーの平均値の比較では，スクールカウンセラーが教師より高く，その差は有意であった。また，項目７と項目19の相関関係は，スクールカウンセラーではみられたが，教師にはみられなかった。さらに，項目19の平均値をみると両者とも高い数値を示している。このことから，コーディネーターとなる教師が重要と考えているスクールカウンセラーは，教師，スクールカウンセラー，スクールソーシャルワーカーの三者間のつながりといった，広い連携の形を意識しているが，教師は，教師とスクールカウンセラーといった，二者間の連携を意識しているものと思われる。

以上の四点から，教師とスクールカウンセラーの連携に関して，同じ意識や意識の差があることがわかった。この同じ意識や意識の差を念頭において，両者が連携する際に，コーディネーターとなる教師が中心となって，細部にわたり調整していくことが重要と考える。

(2) スクールカウンセラーの活用に関する実態の集計・分析

スクールカウンセラーの活用に関する実態の集計・分析については，以下の質問における有効な回答に対して，選択項目ごとの割合を示したものである。

ア　スクールカウンセラーの業務内容に関する意識の実態

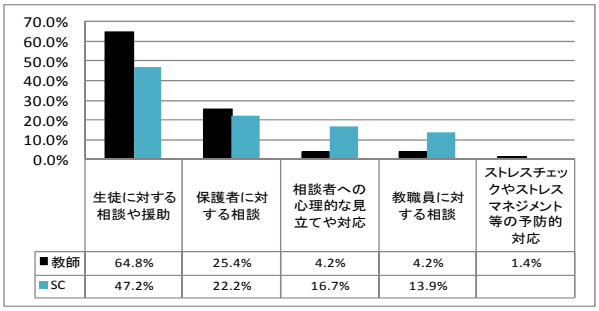

図３　この１年間で実際にかかわった一番の業務内容

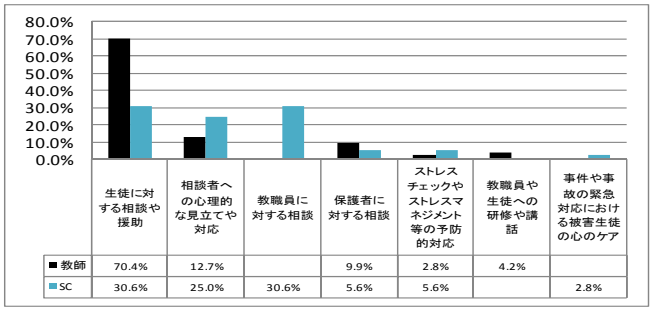

図４　一番に重点を置くべきと考える業務内容

「スクールカウンセラーの業務内容に関する質問」の結果から，図３のような実態が明らかになった。

この１年間で実際にかかわった一番のスクールカウンセラーの業務内容について，「生徒に対する相

談や援助」とした教師は約６割となった。「保護者に対する相談」と合わせると約９割の教師が，生徒や保護者に対する相談ととらえていた。それに対してスクールカウンセラーは，「生徒に対する相談」「保護者に対する相談」「相談者への心理的な見立てや対応」「教職員に対する相談」の４項目に割合が分散した。「生徒に対する相談や援助」「相談者への心理的な見立てや対応」「教職員に対する相談」には，教師とスクールカウンセラーの差がみられ，両者におけるスクールカウンセラーの業務内容のとらえ方は同じではないと思われる。教師はこの１年間で実際にかかわった一番のスクールカウンセラーの業務内容を，大きくとらえているのに対して，スクールカウンセラーは，教師よりも業務内容を詳細に区別してとらえていると考えられる。

図４から，一番に重点を置くべきと考えるスクールカウンセラーの業務内容について，教師とスクールカウンセラーの意識の差が見られた。「生徒に対する相談や援助」とした教師は約７割となった。それに対してスクールカウンセラーは，「生徒に対する相談や援助」「相談者への心理的な見立てや対応」「教職員に対する相談」の３項目にほぼ同じ割合で分散した。「保護者に対する相談」「ストレスチェックやストレスマネジメント等の予防的対応」などにも少ないながら割合がみられた。教師はこの１年間で実際にかかわった一番のスクールカウンセラーの業務内容と同様に，一番に重点を置くべきと考えるスクールカウンセラーの業務内容を大きくとらえているのに対して，スクールカウンセラーは，教師よりも詳細に区別してとらえていると考えられる。「教職員に対する相談」について，スクールカウンセラーは約３割となったのに対して，教師は，この１年間で実際にかかわった一番のスクールカウンセラーの業務内容では少しあった回答が，なしとなった。教師は「教職員に対する相談」をあまり意識していないが，スクールカウンセラーは力を入れて取り組むべきと考えていると思われる。

イ　学校カウンセリングの相談内容に関する意識の実態

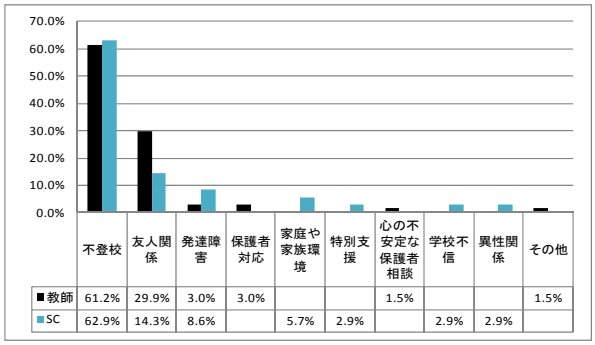

図５　この１年間で実際にかかわった一番の相談内容

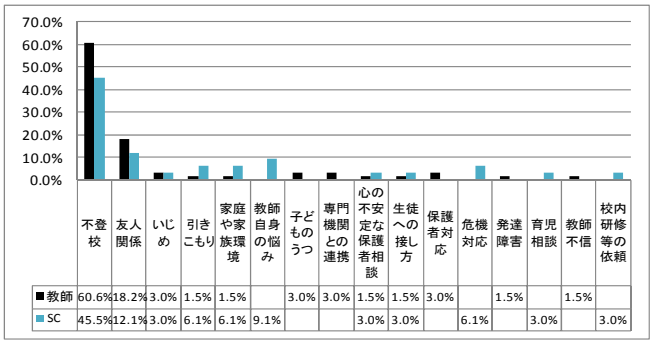

図６　一番に重点を置くべきと考える相談内容

「学校カウンセリングの相談内容に関する質問」の結果から，図５のような実態が明らかになった。

この１年間で実際にかかわった一番の学校カウンセリングの相談内容では，「不登校」と「友人関係」が上位項目となった。「不登校」では，教師とスクールカウンセラーとも同じ高い割合を示した。教師は，上位２項目以外に「発達障害」「保護者対応」「心の不安定な保護者対応」に割合を示したのに対して，スクールカウンセラーは「発達障害」「家庭や家族環境」「特別支援」「学校不信」「異性関係」に割合を示した。スクールカウンセラーは，学校カウンセリングの相談内容においても詳細に区別して相談内容をとらえているものと思われる。上位項目が「不登校」「友人関係」「発達障害」となっており，人とのかかわりに関する問題を要因とする相談が多くなっているものと推察される。

図６から，一番に重点を置くべきと考える学校カウンセリングの相談内容について，両者とも，「不登校」と「友人関係」が上位２項目となった。上位２項目以外に教師は，「いじめ」「子どものうつ」「専門機関との連携」「保護者対応」などに割合を示したのに対して，スクールカウンセラーは「いじめ」「引きこもり」「家族や家族環境」「教師自身の悩み」「心の不安定な保護者相談」「生徒への接し方」「危機対応」「育児相談」「校内研修等の依頼」に割合を示した。スクールカウンセラーの業務内容と同様に，教師は一番に重点を置くべきと考える学校カウンセリングの相談内容を大きくとらえているのに対して，スクールカウンセラーは，教師よりも詳細に区別してとらえていると考えられる。この１年間で実際にかかわった一番の学校カウンセリングの相談内容では，両者の回答がなかった「教師自身の悩み」について，スクールカウンセラーは約１割となったのに対して教師の回答は，なしとなった。スクールカウンセラーは，「教職員に対する相談」を必要と考えているものと思われる。

ウ　考察

スクールカウンセラーの活用に関する意識の実態から，学校カウンセリングの方向性が示唆された。

「スクールカウンセラーの業務内容に関する質問」と「学校カウンセリングの相談内容に関する質問」から，教師は，スクールカウンセラーの業務内容や学校カウンセリングの相談内容を大きくとらえているのに対して，スクールカウンセラーは詳細に区別してとらえているものと考えられる。このとらえ方に対する意識の差があることを理解した上で，連携する際には，両者で細部にわたり確認することが重要と考える。

一番に重点を置くべきと考えるスクールカウンセラーの業務内容と一番に重点を置くべきと考える学校カウンセリングの相談内容から，教職員への相談も必要と考える。教職員が相談者に関することのみならず，自身の悩みを含め，より気軽にスクールカウンセラーへ相談できる環境作りが必要と思われる。

Ⅴ　研究のまとめ

本研究において，スクールカウンセラーの積極的活用と依存に関する意識では同じ意識が，カウンセリングを学ぶこととコンサルテーションを受けることに関する意識では意識の差が，スクールカウンセラーの教師・生徒・保護者に関する積極性では同じ意識が，連携の範囲の広さに関する意識では意識の差があることがわかった。また，スクールカウンセラーの業務内容や学校カウンセリングの相談内容のとらえ方に対する意識の差があることもわかった。教師とスクールカウンセラーのよりよい連携の在り方として，これらの連携に関する同じ意識や意識の差があることを理解した上で，連携する際には，コーディネーターとなる教師が中心となって，細部にわたり調整することが重要であると考える。

Ⅵ　本研究における課題

本研究は，教師とスクールカウンセラーの連携に関する意識や連携の現状を調査，分析することで連携に関する意識の差や相関関係を明らかにするとともに，よりよい連携の在り方を探ることを目標としてきた。今回，学校側の調査の対象をスクールカウンセラー担当教師としたが，連携に関する意識の実態をより正確にとらえるためには，相談者と密接にかかわっている教師を対象に調査することも必要と考えられる。さらに，今回の調査で明らかになった連携に関する意識の実態や分析結果を，いかに学校現場に反映させ，実践するかが課題である。

＜引用文献＞

内田利広　2009　「スクールカウンセラー活用と教育相談体制」『生徒指導と教育相談』，p.116，創元社

青森県教育委員会　2009　「平成20年度青森県全体におけるスクールカウンセラー配置事業相談状況集計表」『第１回スクールカウンセラー活用連絡協議会』，p．７

吉田憲司　2005　「スクールカウンセリング活動補助事業の現状と課題について」『月刊生徒指導９月号』，p．９，学事出版

＜参考文献＞

有村久春　2008　『[改訂版]キーワードで学ぶ　特別活動・生徒指導・教育相談』　金子書房

伊藤美奈子　2005　「スクールカウンセリング活動の現状と課題」『月刊生徒指導９月号』　学事出版

大塚義孝　1996　『スクールカウンセラーの実際』　日本評論社

＜参考ＵＲＬ＞

大矢珠実　2003　「中学校における教師とスクールカウンセラーの連携に関する研究」
http://educational-psychology.edu.mie-u.ac.jp/thesis/2003/oya/(2009.8.26)

文部科学省　2007　「スクールカウンセラーについて」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/kyouiku/houkoku/07082308/002.htm(2009.8.7)